

「学力向上の処方箋～校内研修の活性化～」

講演 高知県教育委員会スーパーバイザー

(前東京都東村山市立大岱小学校長) 西 留 安 雄

1 はじめに

みなさん、こんにちは。西留です。私がいた大岱小では、1年に3人も初任者が入ってきます。3年で9人です。学校やっていけますか。(でも) ギブアップできないのです。

結局分かったことは、「こうすれば、こういくだろう」と単純なことに気付いたのです。校内研究というのは、そんなに難しいことじゃないと思います。先に教員になった方が難しくしていたと、結論づけられます。

(私たちの) 校内研究協議会では、改善策を追究します。(しかし多くの) 学校は成果と課題で終わってしまい、非常に問題があるのです。それでは、授業はうまくならない。全員で改善策をしっかりみつけて、次はこうしよう結論づけることです。あいまいな課題をちょこっと出して、終わりにするようなやり方は、もう無理だと思います。

特徴的なのは私たちの学校では、(講師が来ている時は 60 分を過ぎますが) 30 分しかやりません。それ以上は多忙感につながってしまいます。

2 大岱小の新校内研究システム

(1) VTR 視聴 (新校内研究システム)

【ビデオの概略】

- ・授業の 5 分前に、授業者が授業のポイントを参観者に廊下で説明する様子。
- ・多くの他府県の先生方と一緒に行うワークショップ型研究会の様子。

- ・大岱指導修自の助言と授業者が改善策を書き今日からやっていくことを宣言する様子。
- ・参観者論文と授業者の課題論文を作成している様子。

(ビデオを見ながら)

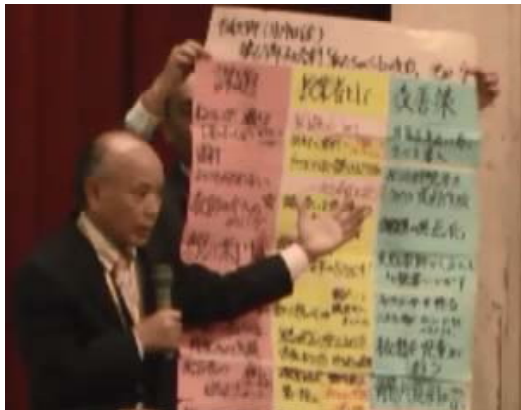
研究主任がデータを出して、子どもが考える時間があったのかどうか話しています。彼は3年目の26歳から研究主任やっています。先輩はいるけれど適材適所ですね。「よい授業じゃなかった」と、はっきり言っています。

ワークショップで他のやりとりを聴いて、黄色い付箋に自分で改善策を書いていく。今、彼(授業者)がしゃべっているのは、今日からやっていくことです。

教師は授業するだけではなく、コーディネートする力とか、校内で確実に力をつけていけないといけません。合格しないと次の教師にバトンタッチできません。3回目で合格させますが、その位、将来教員としてやっていく、しゃべり方、全体の見方を鍛えていく。3～4年かけて、この制度を作りあげました。

毎年、初任者が3人位入ってきて、どうやって授業を教えていくのか。研究授業となると教材解釈や、指導要領を吟味することに走りがちですが、むしろ根っこの部分、授業の組み立て方、子どもの話のさせ方、聴き方、板書の仕方をとことん教えていく。私たちは授業の基礎と名前付けました。併せてビデオを見て覚えてもらうのです。頭の中で台本を全部読んでもらうのです。4回に1回成功す

る授業ではなく、4回とも70点は取れるという授業をさせたいのです。言わせてもらくと、スーパーティーチャーはいらない。その教員がいなくなっても7割以上の教員が合格点を取れるような学校にしたかったのです。



(2) VTR視聴（授業の進め方の事例）

【ビデオの概略】

- ・授業の最初に本時の課題と言語わざ、学習の進め方を確認する様子。
- ・子どもたちは学習方法をまとめた「まなブック」を活用しながら学習する様子。（課題→自力解決→情報交換タイム→3人グループ→6人グループ→全体交流→振り返り）

（ビデオを見ながら）

先生が一人で教えるのではなく、解き方のパターンを机の上にのせています。特徴的なのは、教員がほとんどしゃべらない、子どもたちが進めています。また、教師があまり板書しないで、子どもが板書しまくる方式です。教師と子どもとの一問一答が消えています。これが究極の私たちの目指す授業です。先生が一生懸命教えるのではなく、子ども同士が学んでいます。それには話し合いの仕方、ルールを視覚で教えています。こういう約束を1年生から、がっちり教えていくのです。

学び方の本「まなブック」。算数の文章題をどうやって解いていったらいいか、解き方のヒントが書いてあります。こういうのがないから、私たちが開発しました。もちろん若い先生が多いから、先生に頼らず自分たちで

学ぶ方法です。私たちは一年中使えるものをつくりたかったのです。

「研究の手引き書」。これがないかぎり、校内研は一步も前に進まないです。ここにはノウハウが書いていますから、常に読みながらやっていきます。

3 学校の常識に挑戦した大岱小の実践

（多くは）子どもが大事と言いながら、結局は前年度踏襲で、会議が優先されている学校になっています。発想の転換が必要じゃないかと思います。

東京の学校は厳しいところがあります。午前中4時間で給食があるのに、「今日、先生たちは研究会があるから帰ります」は通じません。給食を食べたら5時間目がある、これが常識です。これだけですが、私たちが意識を変えていかないと難しいと思います。

（大岱小は）大変な問題が多い学校でした。学力が低下しているのに、隣の学校と同じことをしているのです。こんなことでいいのかと直感しました。結局、国会と同じで学校の中で事業仕分けをしました。会議を厳選して、校内研究の時間を生み出さないといけない。普通の形で校内研をやっているのは、多忙感がきますので、起案を行う前にワークショップを取り入れ、職員会議を廃止しました。

東京では、一役一人制が増えました。会議をなくすために、権限委譲していくのです。東京都のシステムは役所と同じです。なぜ職層でやるのかというと、スピードが違うのです。課題には、スピードで解決しないといけないのに、学校が一番まずいのは、危機管理に疎いということ。問題がおきたら、「こう行くんだ」と職層で決済をしていくのです。

みなさんPDCAですよ。最近になって年度末評価とか、反省していないですか。4月もD、5月もD、6月もD、PDDDDCAなのです。PDCAはくるくる回るのです。年度末の忘れた頃に評価をやってはダメなの

です。PDCAの一番弱いのは、CとAが意外と蔑ろにされていることです。だから、CとAとPを一気にやってしまうのです。

運動会終了後は夕食会に行かないで、きちんと反省することです。企業はみんなそうしています。課題は何だったのか。来年どうやって改善策を出すのか。ここでCとA、全部一緒にしてしまうのです。そして2日後には、もう25年度を提案していくのです。DCAPサイクルは、私たちが非常に大事にしてきたのですが、結構、多くの学校で最近使われ始めました。よさは、年度末評価や新年度計画がいらぬことです。こういうことが校内研究の時間を生み出すひとつなのです。

みなさんのところ、4月1日から会議だけですよ。子どもが一番不安な時に、子どもに、くっつきたいじゃないですか。だから校内を暦通りの1月～12月にしてしまうことです。夏休み中にはいろいろなものを作っていますから、新年度計画は12月から、校務分掌も1月からスタートする。すると3月、4月に何が違うのか。3月20日にも4月10日にも研究授業が入ってくるのです。極端に忙しい月を作ってしまうと、そこに学校の危機がでます。

給食4時間で帰さないで、悪くとも午前中5時間入れていく。そうしたら親も許してくれるだろうと思います。午前5時間授業も、結構増えてきています。学力を上げる一番のポイントは授業時数の確保なのです。

私たちを見てください。6年生は100時間、3年生は150時間オーバーですよ。大岱小の4月は、第1週は、給食がなくても全部4時間かけてやる。第2週から全校5時間。1年生も5時間。働く親が増えているので、働く親を応援したい。私たちは自分たちの教師観を変えるべきだと思います。行事等は、一発花火じゃなくて、言語力とか、子どもの思考力を育てることを含めたロングランの行事をやってほしいです。(ノートコンクール、ノ

ート大賞等)

(大岱小の)子どもたちは、塾にも行けない保護家庭が多いところです。でも勝負はできます。授業時数を大事にしていったとか、授業のパターンを覚えて全職員がやっていったとか、研究の手引き書とか、これだけやってくると学校は大きく変わります。

教育内容のスリム化とか授業カットは絶対にしない。子どもや保護者の責任にしない。教育委員会がどうだこうだではなく、私たちが自分たちの学校を自分たちで振り返ったから、うまくいったのではないのでしょうか。

あと実は、ゆとりが大事なのです。会議を減らしていくと、教員にゆとりがあるわけです。だから学校に行くと、教員は、ほとんど教室に行っています。4時半までは居残り勉強をしてくるので、4時半までは会いません。

校内研究も、モデルとなるような授業が分からない、これが大きいです。皆さん、あのビデオを職員に見せたいじゃないですか。あのビデオを実際に見せて、「あのパターンでいこうよ」と具体的にいくということです。

よい授業は教師の出番が少ない。子どもたちは分からないから騒ぐ、学力をつけてあげれば騒がないのではないかと思います。

「ティーチャーズノート」。この中に、例えば授業の見方、指導案の書き方、話のさせ方、聞き方とか全部載っているのです。研究のスケジュールも、年間で決まっていますから、逆算して研究授業の3ヶ月位前から指導をしていきます。

指導案の書き方は、一番最初に学力テストのデータを載せることが大事です。学力テストを独立させてはダメです。日々の指導案とリンクさせて、全職員が書くことで自分の弱点を知るのです。前回の授業者の反省を受けてというページを私は大事にしています。前回の授業で出た課題を解決するために、私は今回の授業で、こういうふうに対応していく。連動をかけていくのが校内研究ですから、そ

のあたりは大事にしてほしいと思います。

この「まなブック」を見て下さい。子どもたちも授業の流し方を知っています。若い先生だと、「先生、次は集団解決のこの部分ですよ」と子どもが言います。そこを育てたかったのです。研究は、教員だけのものではなく、子どもたちの研究でもあるのです。



授業は、言語と学び合いと振り返り、これは昔から言ってきました。この3点セットで子どもたちに教えていくということです。学び合いのパターンは、ここに全部書いてあります。「このテキストからみなさい」と、具体的に言ってやることです。

書くことは思考の過程、自分の頭を整理するにはいいのですが、書いただけではきちんと人に話ができない。実験中ですが、1日の朝の会で、全員に今日の学びの目標を言わせ、帰りの会で、今日の振り返りを言わせる。授業での言語活動に合わせて、授業以外でもやらせていくということです。

子ども版の研究授業。よい授業を子どもたちに見せるのです。年に4回見せていました。周りを1年生からぐるっと囲んで、研究主任が解説を入れ、学習のモデルを学校全体で共有しています。これは校内研究にとって、すごくよかったと思います。

研究協議会では、子どものアンケート、保護者のアンケートのデータをすぐ報告していきます。データは確かで、ごまかせないので大事だと思います。私たちは、時間がなくて成果をおかず、「いきなり課題方式」でや

っていきかないのです。

研究協議会には、全部ローテーションで10人位の人が関わりますから、こういう鍛えが若手教師の育成につながっていくと思います。「大岱指導修自」も効き目があって、みんなインターネットで調べたり、紙芝居とか道具を作ったり、いろんなことやってきます。将来の人材育成がこういうところで、できたかなと思います。

最後は1200字の論文を書いて送らせています。人に世話になったら葉書一枚も出すのが当たり前です。すると同じ指導主事からまた指導を受け、キャッチボールになります。

研究は、共通理解していくと低い目標で一致せざるを得ないので、研究を走っている人間に合わせる、これが大岱流だったのです。

研究協議会は、参加者を巻き込まないとダメです。話の聞きっぱなしで帰るのではなく、ワークショップしたり、隣の人や4人組で話をしたりしながら研究会をやっていく、それが私たちが生み出した研究協議会です。

4 おわりに

(研究授業は)最低全員2回以上で、リベンジをもう1回する。そのためには時間を生み出さないといけないから、DCAPのような学校改革になっていくのです。5、6年生から教科担任制でいきました。習熟度別、大岱ドリル、漢字検定、サマースクール、セカンドスクール、放課後学習、強いてあげるならこういうことが、学力をあげていると思っていました。

『世の中の人は何ともいえないへ我がなすことは我のみぞ知る』

どういわれようが、自分が校長であれば、子どもを愛して、職業を愛して変えていく腹づもりが必要じゃないかと思います。ありがとうございました。